

2011 JAAP 写真展 一般公募作品発表

JAAP 会長 : 瀬尾 央

今回の JAAP 写真展一般公募部門へのご応募、ありがとうございました。

前回は大幅にしのぐ、また私たちの予想をはるかに超える 378 点のご応募がありました。中には 3 回に分けて作品群をお送りくださった方もおられました。

2L プリントによる審査という、極めて低い敷居を設定したことによるものでしょう。少しでも多くの飛行機写真愛好家に JAAP の活動を知ってもらいたい、一緒にできることはできるだけ手を携えて行いたい、という心づもりが、少しはお伝えできたかな、と思っています。

今回の公募の最大の狙いは、飛行機写真にかかわるすべての

人が、「いい写真」って何だろうと自分に問いかける契機になってほしい、ということでした。「いい写真とは何？」そのスタンダードを、ゆっくりでも明らかにしていきたい。デジタル写真では、カメラが撮ったのか、撮影者が撮ったのか、分別つかないほどの自動化が進んでいます。それゆえ急務です。

東京や大阪のど真ん中で、JAAP 会員作品も、JAAP 講習会参加者作品も、はたまた一般公募選考作品も、すべて同じサイズの額装写真として展示する、ということには受け入れ側としては非常なリスクをふむ企画でした。いわば、アマプロ・オープンの写真展です。

JAAP は、航空にかかわるプロ写真家集団ということになっ



細瀬 達也 「オキナワ」



中田 毅満 「untitled」



片山 研吾 「水煙輝く」



近藤 康二 「Luminous Stream」



松下 将士 「その朝、来る」

ています。プロであるにもかかわらず、作品性の強い応募作品に、作品性として負けたら立場がないのではないかと。このことは容易に想像できたことでした。どこかに書きましたが、プロであることと作家であることは、決してイコールではないからです。

しかし、JAAP の存在を強固なものにするには、この組織自体がもっと採られなければならないと、私は会長として常々感じています。そのためには、機会あるごとに外から刺激を受け、時には負けたという実感も感じ、それをテコに、次にはより優れた作品を提示できる力を出さなければならない、と思っています。

さて、応募作品を概観した感想ですが、約 6 割の応募作品については、いい写真とそうでない写真の区別をどこでつけるか、その点をまず学んでほしいと思いました。

航空雑誌の口絵や投稿写真にその解があるとは思えません。もっと広く、たくさん写真を見て、飛行機に限らない様々な分野の写真を見て、心引かれるものとは何だろうということを考えて下さい。

飛行機が写っていればいだろう、というのでは、応募選考に際して宝くじを買うようなものです。

撮影者として、そのシャッターチャンスに共感を覚えるものが、残りの 4 割のうち、約半数ありました。私も同じ場に居合わせたら、きっと撮ったでしょう。いや、その前に、その状況を発見したことに、まず敬意を表します。

そこで作品にするかしないか、それはちょっとした技術かな、と思います。発見しただけではダメで、何かしら写真に仕立てる、作品に仕立てる技がほしいと思います。画的整理、すなわち画をどう切りとるか、レンズ選択、トリミング等でかなり内容が変わります。事後の画像補正も結構効果がありますが、上位の約半数の域に一步抜け出す早道は、このシーンはかくあるべし、という理想像を、撮る前に考えること



三浦 泰彦 「桶川の幻」

かな、と思います。

70 数点の写真が残りました。では、きちっと撮れているか否か。いわゆるピントも露出も適正か、は当然のこととして、「人の目に止まる写真」であるか、どうか。

航空雑誌の投稿写真などでは、「人の目に止まる」要素は、新鋭機であり、珍機であり、マーキングや吊るしモノで、被写体がモノとして「人の目に止まる」ものです。この域から写真的に一步前進し、「写真的に」目に止まるか、どうかを考えました。大袈裟に言えば、モノを超えてコトを語る事ができるか、です。

加えて、いくら技術的にしっかりしていても、あるいは、よくぞやったり、というシャッターチャンスでも、同じ傾向の写真をよく見るなあ、という印象のものは落としました。画的存在感が強くないと、独自性がないと、写真展会場で埋没しかねません。

20 数点が残りました。どの作品も魅力的です。作品的な差もそれほど大きなものではありません。東京展における予定展示位置には、10 点の選考数を考えていました。したがって、惜しみつつも絞らねばなりません。

この段階で、一般コンテストとは異なる決断をしました。シビアに微細な作品的優劣を決めるのではなく、展示会場の一般公募用パネル全体のバランスを考え、航空の分野（軍用機・民間機）、撮影時刻（朝・昼・夜）、機影を引き寄せたもの・突き放したものの、写真展を行うにあたり、その壁面をひとつの組写真のように考え、最大の画的（壁面的）主張を出せるように選択をしました。

写真雑誌のコンテスト発表であれば、掲載写真のサイズを大きく変化させて、選考結果も納得させることが可能ですが、今回は全作品同一サイズです。

目的にかなうか否か。プロの仕事には常に相手があります。クライアントであり、編集者であり、その先の読者で



佐川 貴史 「交錯」



斉藤 英希 「一翔一 猛禽」



佐々木 豊 「空の糸」



龍野 陽亮 「AIRBORNE」

キャプションが、写真の価値を左右する場合が往々にしてあります。あえて言い切ってしまうなら、発表を前提としたそうした捉え返しが、モノを超えてコトを語るという場面で、知的なアプローチか否かを表してしまいます。

- 片山研吾「水煙輝く」
- 近藤康二「Luminous Stream」
- 斉藤英希「一翔一 猛禽」
- 佐川貴史「交錯」
- 佐々木豊「空の糸」
- 中田毅満「無題 (Diving)」
- 細渕達也「オキナワ」
- 松下将士「その朝、来る」
- 三浦泰彦「桶川の幻」
- 龍野陽亮「AIRBORNE」

最後に、最終選考に残ったその他の作品のタイトルのみを記載します。

- 「一粒の輝き」
- 「突然ヒョッコリ」
- 「秋日落日」
- 「a-no-ko-ro」
- 「Jr.」
- 「crossing」
- 「メタリック・ジャンボ」
- 「夕暮れ」
- 「老兵は死なず」
- 「In the Town」
- 「旭日昇天」

次回もまた、問題なければ同じような写真展を開催したいと考えています。

プロは雑多な場所に出かけます。その都度、最初から撮る場所を探し出す作業が伴います。翻って、日々自分の守備範囲といえるベースをもつアマチュアの皆さんは、心づもりひとつで写真内容を深めることが可能な日常に在るともいえます。

今回はさらに、作品性において、JAAP 会員を追いつめて下さい。

あり、その相手をいかに満足させるかが問われています。それと同様のことを、この公募選考でも実行し、時折写真家を離れ編集者に変身する JAAP 会長が、その点を重視し決断しました。

そうした選考過程を経て、以下の方々作品を選びました。じつは、撮れても書けないプロ写真家には、なかなか仕事が回ってきません。特に報道的な分野では、1 行のタイトルや

写真展「SKY GRAFFITI 2011」は以下の日程で行います。ぜひご来場ください。

・東京展

期間：2011年11月11日（金）～11月17日（木） 午前10時～午後7時 最終日は午後4時まで
会場：富士フィルムフォトサロン（フジフィルムスクエア TEL03-6271-3351）

・大阪展

期間：2011年12月9日（金）～12月15日（木） 午前10時～午後7時 最終日は午後2時まで
会場：富士フィルムフォトサロン・大阪（本町富士フィルムビル1F TEL06-6205-8000）

なお、JAAP 講習会参加者優秀作品の一部も併せて展示いたします。